

『元朝秘史』成立の一断面---与位格語尾-dur/-turの分析

中村雅之

1. 問題点

現行本『元朝秘史』において、巻一および巻二における表記法と、巻三以降における表記法に種々の違いが見られることはよく知られている¹。本稿で扱う与位格語尾の「-dur/-tur」²もその一つである。巻一および巻二(以下、A群と呼ぶ)においては、与位格語尾「-dur/-tur」が有声・無声によって書き分けられず、その意味・用法によって「突兒」(傍訳<時分、時>)、「途兒」(傍訳<行>)、「図兒」(傍訳<裏>)の三様に分かれる³。一方、巻三以降(以下、B群と呼ぶ)では、意味ではなく音声によって、「突[㊦]兒」(-dur)と「途[㊦]兒」「図[㊦]兒」(ともに-tur)とに書き分けられる⁴。

まず、A群とB群の表記の違いがどのようにして生じたのかということ自体が大きな謎であるが、さらに栗林(2002)によれば、B群においても「-tur」を表す「途[㊦]兒」と「図[㊦]兒」の書き分けはA群と同様の原則によっているという。つまり、B群においては音声による書き分けを原則としつつ、意味による書き分けも部分的に行われている。この複雑な状況がいかんして生じたかについて、またその背景等について、以下にいくつかの仮説を提起してみたい。

2. B群における校訂作業

状況をもう一度確認すると、以下のようになる。

①A群(巻一と巻二)では与位格語尾「-dur/-tur」が音声ではなく意味によって

-
- 1 小澤(1996:92頁)では巻一・巻二をA群、巻三以降をB群として、両群の主な違い6項目を挙げている。第1は本稿で取り上げる与位格語尾。第2は使役形接辞をA群で「-温勒-」、B群で「-兀勒-」とすること。第3は「-r」をA群で「-兒」、B群で「-[㊦]兒」とすること。第4は実詞再帰格語尾をA群で「-巴安/-別延」、B群で「-班/-邊」とすること。第5はA群でのみ「古」を「qu~Gu」にも用いること。第6は仮定副動詞形をA群で「-basu/-bēsū」とし、B群で「-’āsu/-’ēsū」とする傾向。このほかに、小澤(1996)のテーマである過去時制の「-ba/-be/-bai/-bei」(A群で「-罷」、B群で「-罷原作別/-罷原作伯」など)を含めると、A群とB群の主な違いは7項目ということになる。
 - 2 厳密には「-dur/-dür/-tur/-tür」であるが、「-dur/-tur」と略記する。以下同。
 - 3 栗林(2002)を参照。
 - 4 具体的な音声条件は、母音・二重母音・子音「-l/-m/-n/-ng」の後では「-dur/-dür」となり、子音「-G/-g/-d/-b/-r/-s」の後では「-tur/-tür」となる。

書き分けられる。

「突兎」(～の時に) <時点を表す: 傍訳「時分、時」>

「途兎」(～へ、～に) <方向を表す: 傍訳「行」>

「図兎」(～に、～で) <場所を表す: 傍訳「裏」>

②B群(巻三以降)では「-dur/-tur」が原則として音声によって書き分けられる。

「突兎」(-dur)

「途兎」(-tur)

「図兎」(-tur)

③B群の「-tur」はさらに意味によって分けられる。(巻八を除く)

「途兎」(-tur/傍訳「行」)

「図兎」(-tur/傍訳「裏」)

それぞれ若干の例外はあるが、全体の傾向は上の通りである。例外のパーセンテージ等については栗林(2002)を参照されたい。

最後に示した③の状況は、一見不合理であるように見える。B群が音声による書き分けを徹底するのであれば、「-tur」に対しては一つの表記だけで十分なはずである。このような不徹底がわざわざ後からなされるとは考えにくいから、③の状況はB群が音声による書き分けを行う以前から存在していたと考えるのが妥当である。つまり、①のような意味による書き分けは、当初『元朝秘史』全巻を通じて行われたもので、後にB群においてのみ音声による書き分けが導入されたと考えられる。具体的には以下のような変更が加えられたことになる。

「突兎」(-dur) <傍訳「時分、時」> → 「突^ㇿ兎」

「途兎」(-tur) <傍訳「行」> → 「途^ㇿ兎」

「途兎」(-dur) <傍訳「行」> → 「突^ㇿ兎」

「図兎」(-tur) <傍訳「裏」> → 「図^ㇿ兎」

「図兎」(-dur) <傍訳「裏」> → 「突^ㇿ兎」

このうち「-兎」→「^ㇿ兎」という変更はここでの議論には直接関係しない。下線を施したものが音声による書き分けを導入して音訳字を改めた部分である。なお、「～する時、した時」に用いられた「突兎」はほとんどが形動詞語尾(-qu/-qui/-gsan等)に付き、音声的にも有声の「-dur」が期待されるため、B群においても「突」を変更する必要はなかった。上のような変更を経た結果、B群では「-dur」に対してはその意味に関わらず「突^ㇿ兎」、「-tur」に対しては方向を意味する場合には「途^ㇿ兎」、場所を意味する場合には「図^ㇿ兎」が記されることになったのである。

3. A群の表記法の背景

A群においては有声の「-dur」と無声の「-tur」を書き分けようとする意図が見えない。とりわけ「途^{ㄊㄨ}児」「囟^{ㄊㄨ}児」は「-tur」と「-dur」のいずれにも用いられる。当初は全巻を通じて同様の状況にあったと思われることは、上に述べた通りである。一般語彙における「du」と「tu」は「都」と「禿」で明瞭に区別されているのであるから、与位格語尾だけが特殊な扱いになっている。

このような状況を生じた背景には、ウイグル文字とパスパ文字の表記法の影響が考えられる。ウイグル文字モンゴル語においては、与位格語尾に限らず有声と無声の区別がない。パスパ文字モンゴル語においては、一般に/tu/と/du/の区別が厳格になされるにもかかわらず、与位格語尾に関しては全て「dur」であり、有声・無声の区別がなされない。このような伝統に慣れたものにとっては、与位格語尾の「-dur/-tur」を区別しないのは自然なことであったかも知れない。なお、「突/途/囟」は与位格語尾専用の音訳漢字で、他の語彙では原則として用いられない。したがって、ウイグル文字やパスパ文字と同様に、一見しただけで与位格語尾であることが分かる仕組みである。

4. 「突」は/tu/か/du/か？

2節に述べたように、B群においては、「途」「囟」のうち/dur/と読むべき部分を「突」に書き換えている。換言すれば、モンゴル語の/du/を表す漢字として「途」「囟」は不適格であり、「突」が妥当だと判断したということである。そのことから翻って考えれば、B群の校訂時に「途」と「囟」の漢字音は無声有気の声母[tʰ]を持っており、「突」は無声無気の声母[t]を持っていたということになる。

「突」は『中原音韻』において「毒/独/読」と同音(すなわち無声無気)であり、無声有気の音はない。つまり、14世紀の北方音においては[tu]が普通の音であった。しかし現代北京音では[tʰu]であるから、明代～清代のある段階で有気音に変わったことになる。一方、主に南京官話音によると考えられている明末の『西儒耳目資』では「突」は「禿」と同音(=無声有気)であり、無声無気の音はない。このことから、北京語の[tʰu]は南京官話音の影響で形成されたのではないかと推測することが可能である⁵。

仮に「突」を[tʰuʔ]と発音する南京音の状況を明初(14世紀後半)まで遡らせてよいならば、漢字音訳本『元朝秘史』の編纂時には、「突」は北京音[tu]、南京音[tʰuʔ]で

5 南京官話が北京語に与えた影響は多大なものがある。最も顕著なのは、旧入声字における文言音の形成である。「覺(白話音jiào、文言音jué)」「得(白話音dèi、文言音dé)」などにおける文言音は南京官話音の模倣によって形成されたものである。

あったことになる。

5. 漢字音の基礎方言問題との関わり

与位格語尾「-tur/-dur」の状況を漢字音の基礎方言問題と関連づけて考えると、次のようなことが言える。

モンゴル語の漢字音訳に際して利用された漢字音は南京音によったと考えられる⁶。したがって、A群の(そして当初は全巻の)「突児」「途児」「図児」は、その漢字音に拠る限り、全てモンゴル語の/tur/に対応する音しか表すことができなかった。音訳者たちは与位格語尾については清濁を区別する必要を感じておらず、むしろ意味による区別をしようとしたため、同音の「突児」「途児」「図児」をその区別に用いた。

音訳作業が完成した後に、B群の校訂が行われた。校訂にあたったのは、漢語に通じたモンゴル人かモンゴル語に詳しい北方の漢人であった。校訂者は与位格語尾の清濁が混乱しているのを不満とした。なぜなら、校訂者の用いた漢語は北方漢語だったからである。南京音に拠った場合には与位格語尾に用いた漢字は全て同音であったのに対して、北方音に拠った場合には、「突児」は/dur/に対応するものの、「途児」「図児」は/tur/と/dur/の双方に対応し、規則性がない。そこで、有声の/dur/に対しては全て「突⁶児」に書き換えることにしたのである。

以上のような想定によって、与位格語尾の音訳漢字をめぐる複雑な状況が理解できるのではなかろうか。

<参考文献>

小澤重男(1996)「『元朝秘史』原文における「罷原作伯」についての覚書」『日本モンゴル学会紀要』27.

栗林均(2002)「『元朝秘史』と『華夷訳語』における与位格接尾辞の書き分け規則について」『言語研究』121.

中村雅之(2007)「『華夷訳語(甲種)』漢字音訳の基礎方言」『KOTONOHA』53.

中村雅之(2009)「『元朝秘史』音訳漢字の基礎方言問題」『KOTONOHA』84.

6 中村(2007)および中村(2009)を参照。